

使徒言行録9章23節～25節。かなりの日数がたって、ユダヤ人はサウロを殺そうとたくらんだが、この陰謀はサウロの知るところとなった。しかし、ユダヤ人は彼を殺そうと、昼も夜も町の門で見張っていた。そこで、サウロの弟子たちは、夜の間に彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁づたいにつり降ろした。

サウロは復活の主イエスに出会い、アナニアの按手によって、福音を知らされた。サウロがユダヤ教ファリサイ派の学徒であった時は、律法を厳守して義に至ろうと懸命に励んでいた。しかし、律法を守れたか、守れなかったかと自問自答することに汲々とした生活には、何の安らぎもなかった。そして常に、人と比べて優劣を争い合い、差別、序列化することに血道をあげていた。これらの不安と恐れは律法違反者を攻撃することによって、自分の優位性を保つことへと向かわせた。エルサレム教会の信徒たちへの迫害はサウロの自己正当化の現れであった。しかし、サウロは主イエスの真実（十字架と復活）によって罪が赦され、神に義とされていることを知った。律法の行いに関わりなく、あるがままの自分を「よし」として神は受け入れてくださり、主イエスの復活の命に包まれている。主イエスの十字架と復活を信じる信仰はサウロの心を全く解放した。この解放は主イエスの十字架の愛に倣って生きようとする事へと押し出し、復活の命に与っている喜びで満ちた。サウロは与えられた福音を力強く、大胆にダマスコ近郊で宣べ伝えた。

ところが、ユダヤ人たちは信仰を変えたサウロを殺そうと企んだ。ファリサイ派の教えを捨て、仲間たちを裏切り、イエスをキリストと信じたことが赦せなかったからである。彼らはサウロを殺そうと、昼も夜も町の門で見張り、彼が出入りするところを狙った。ユダヤ教徒たちのサウロ殺害の陰謀を知った弟子たちは、夜、彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁から吊降ろした。当時の町は城壁で囲まれ、所々に門があり、そこから出入りしていた。門には、ユダヤ教徒たちが見張っていたので、城壁伝いに吊降ろしたのである。

パウロは今日のみで読むと、時代に制約された言葉もあり批判もされているが、キリスト教会最大の伝道者であると全ての人々が認めている。しかし、同時代の人々からは、パウロは様々な誤解と偏見を受けていた。下記の四点で苦しんでいた。① エルサレム教会の信徒たちを迫害した。この事実は動かせないもので、パウロの宣教を妨げる要因となった。② ペトロやヨハネは主イエスから直接教えを受けたが、パウロは受けていない。そのため、二流、三流の伝道者と軽く見られた。③ パウロは体に人から忌み嫌われるような病を負っていた（ガラテヤ書4章13節、14節）。④ コリント書（二）10章10節に「わたしのことを、手紙は重々しく力強いが、実際に会ってみると弱々しい人で、話もつまらない」と書いている。コリント書（一）15章8節に「月足らず生まれたようなわたし」と書いているが、パウロは病弱で、容姿も優れていなかったようである。これら教会からの非難、中傷はパウロの弁明によって乗り越えたと言える。ペトロや主イエスの弟ヤコブなどの信頼関係は揺らぐことはなかった。

しかし、ユダヤ教徒からパウロへの迫害はダマスコから始まり、終始、苦しめられた。彼らは神の選民として誇り高く、回心、転向したパウロを許せず、彼の命を奪うまでは断食すると誓うほどであった。そして最後には、ユダヤ教徒たちからリンチを受けそうになり、ローマの千人隊長によってかろうじて救出された。この事件でローマに送られ、それがパウロの殉教につながっていったのである。